

# 2014 年台湾台北市長選挙の分析

湯 晏 甄

(台湾・国立台湾大学政治学系博士)

張 傳 賢

(台湾・中央研究院政治学研究所助研究員)

## 【要約】

2014 年 11 月 29 日、台湾史上最大規模の地方選挙が行われた。このうち台北市長選挙は各界の注目を浴びた。馬英九の施政に対する満足度の低迷や、洪仲丘事件やひまわり学生運動などの公民運動の勃発、さらには世代と分配的正義の価値観の台頭や、人気の高い台湾大学の医師、柯文哲の立候補などにより、国民党が長期わたって政権を握ってきた台北市の選挙情勢は緊張に包まれた。双方は選挙期間中激しい争いを繰り広げ、候補者イメージの比較、選挙の主軸、ネガティブキャンペーンから新旧メディア戦に至るまで、これまでの選挙戦とは大きな差異があった。連勝文の特権階級的イメージは現在の分配的正義の価値観と相容れず、それとは対照的に柯文哲の庶民的イメージや「藍緑超越」という政治理念は多くの市民の支持を得た。また、新しいメディアや情報技術を初めて駆使した柯文哲の広報活動は、「全民参与」という選挙の主軸を実現させただけでなく、各種攻撃の撃退にも成功した。そして無所属の柯文哲が連勝文を破り台北市長に当選するという選挙結果は、台北市の政治勢力図を大きく揺るがした。

キーワード：2014 選挙、ひまわり学生運動、施政満足度、新しいメディア

## 一 はじめに

中華民国第6回直轄市台北市長選挙が2014年11月29日に行われた。同選挙には注目すべきいくつかのポイントがある。まず、この選挙は台湾で1994年に行われた中華民国省市長選挙以降で最大規模の地方選挙であった<sup>1</sup>。また、台北市民の馬英九政権に対する信任投票でもあり中間テストでもあると見なされていた。さらには、2016年に行われる総統選挙および立法委員選挙まで僅か一年強であるため、選挙結果が政党の政治勢力図の変化に関わるだけでなく、二大政党党主席のリーダーシップや人気も表面化することから、両党の大統領候補者選びにも影響を及ぼすことになる。従って、今回の選挙は2016年の総統選挙の前哨戦と位置づけられた。次に、国民党候補だった連勝文は政党や資金力という後ろ盾を持ち、また台北市は本来、藍陣営（国民党系）が緑陣営（民進党系）より強い地盤でもある<sup>2</sup>。しかし、馬英九政権に対する市民の不満の下で基礎票を固めきれたのだろうか。一方で、無所属で政治素人の柯文哲は政党や資金力という後ろ盾を持たない中、国民党が長期政権を握っている台

---

<sup>1</sup> 今回の統一地方選挙は直轄市長、直轄市議員、県（市）長、県（市）議員、郷（鎮、市）長、郷（鎮、市）民代表、原住民区長、原住民区代表および村（里）長の9種の公職を含む。選挙スケジュールに合わせ地方行政区画再編も同時に行われた。このうち最大の改変は県と市の合併昇格である。人口が200万人を突破した桃園県は2014年末に直轄市に昇格した。これにより、台北、新北、桃園、台中、台南、高雄の6大都市が確立し、今回の選挙では6名の直轄市市長が誕生した。この他、同選挙は台湾の政治史上最大規模の地方選挙となり、また、登記人数19,762人、選出人数11,130人で、登記人数も最多となった。各公職の立候補者に関するデータの詳細は中央選挙委員会のウェブサイトを開覧した。（「中央選挙委員会新聞稿」中央選挙委員会、<http://web.cec.gov.tw/files/15-1000-24146,c4133-1.php>。）

<sup>2</sup> 1998年以降国民党の台北市長選挙の得票率は毎回5割を超え、17年連続で市長ポストを押さえてきた。

北市でどのような選挙戦を繰り広げたのだろうか。最後に、選挙結果は国民党が大敗を喫し、無所属候補の柯文哲が得票数85万票以上を獲得して、国民党候補の連勝文に25万票近くの差をつけ圧勝したが、この結果をどう分析するか。以下本論では今回の台北市長選挙に焦点を当て、選挙過程、選挙結果および国民党の敗因を検討し、選挙の全容を明らかにする。

## 二 2014年台北市長選挙の選挙過程

馬英九政権の政策が世論の支持を得られず国民党にとっては不利な状況に加え、藍緑対立の打破を訴える柯文哲の第三勢力が台頭したことから、今回の台北市長選はこれまでの選挙戦と大きく異なった。選挙の過程においては激しい予備選挙、候補者イメージの比較、選挙の軸、ネガティブキャンペーンから、新しいメディアの運用に至るまで、これまでにない新しい選挙戦となった。そんな中、無所属の柯文哲は台北市で17年続いた国民党支配をいったいどのように終わらせたのだろうか。以下、台北市長選挙の過程を分析し、選挙過程が世論の支持率さらには選挙結果にどのような影響を与えたのか理解を深めたい。

まず、候補者選びについて、国民党、民進党共に激しい予備選を繰り広げた。国民党は連戦・国民党名誉主席の長男、連勝文と現職立法委員の丁守中の戦いとなったが<sup>3</sup>、最後は連勝文が48.19%の総支持率を獲得し、35.2%の丁守中に圧勝した。民進党の予備選には呂秀蓮元副総統、顧立雄弁護士、許添財立法委員、姚文智立法委員および周柏雅台北市議会議員が出馬の意思を表明し、まれに見る激戦と

---

<sup>3</sup> 連勝文と丁守中の他、現職立法委員の蔡正元および市議会議員の鐘小平も予備選に参加した。

なっていた。しかし、人気の高い政治素人の柯文哲が2014年1月に正式に出馬表明すると、民進党の選挙戦略に混乱が生じた。柯文哲は民進党には入党せず、同党との「野党大連盟」の結成を提案し、共同で1人の候補者を立てて国民党に対抗することを主張した。双方は10か月にわたる調整後、民進党内での予備選を勝ち抜いた姚文智立法委員と柯文哲との間で第二次予備選を世論調査により実施した。その結果、柯文哲が勝利したため、民進党は台北市の市長選で初めて候補者を立てず柯文哲の応援にまわることを決めた<sup>4</sup>。これにより、今回の選挙は国民党候補の連勝文と無所属の柯文哲との事実上の一騎打ちとなった<sup>5</sup>。

それぞれのイメージについては、連勝文と柯文哲は共に高学歴で政治素人である。しかし最大の違いはバックグラウンドである。連勝文は政治家の家系で資金力も豊富である。父親の連戦は元副総統、現国民党名誉主席で、兩岸（中台）の政治的交流において長期にわたり重要な役割を果たしてきた<sup>6</sup>。また、祖父の連震東は台湾省政府民政庁長、内政部長などを務めた高級官僚であった。連家は連震東の時代から急速に財産を蓄え始め、「2015年の胡潤世界富豪ランキング」によると、連戦の保有資産は61億人民元（約311億台湾元）

---

<sup>4</sup> 柯文哲は民進党県市長選挙「共同政見」討論に参加し、民進党公認の市議会議員候補の応援に全力を尽くすと約束した。民進党は柯文哲が当選しても民進党への加入を要求せず、人事にも介入しないと保証した。（『自由時報』2014年6月17日、<http://news.ltn.com.tw/news/focus/paper/788206>。）

<sup>5</sup> 台北市長候補にはこの他、陳汝斌、趙衍慶、李宏信、陳永昌、馮光遠もいたが、同5名の得票率の合計がわずか2%だったことから、主要な候補者である連勝文と柯文哲の2名に分析を絞った。

<sup>6</sup> 連戦は長年兩岸関係の安定と平和に尽力したことから、2013年に米中政策基金会より特別功勞賞を受賞した。（『中央社』2013年11月13日、<http://www.cna.com.tw/news/aCN/201311130219-1.aspx>。）

で、世界1,911位となっている<sup>7</sup>。連勝文本人に至っては、父・連戦の関係でGE Capitalアジア太平洋執行董事、モルガン・スタンレー投資銀行副総裁および悠遊カード公司董事長を務めたことがある。年齢は44歳とまだ若い、父親の関係で高い役職に就き、豪邸に住み<sup>8</sup>、高級車に乗っている姿は、銀の匙をくわえて生まれてきた若者と見られ、若者の失業率が高く低賃金という現在の状況と相容れないことから、柯文哲より若いにもかかわらず若者には自分と異なる世界に生きる特権階級だと見られた。

一方、柯文哲は公務員の一般家庭に生まれ<sup>9</sup>、台湾大学医学院附設医院（台大医院）の集中治療室および台湾大学医学院の専任教授を務めていた。2011年の「台大医院エイズ患者臓器移植事件」<sup>10</sup>、2013年の「会計法第99-1条修正ミス事件」<sup>11</sup>で政治的抑圧を受けたと感

---

<sup>7</sup> 『東森新聞雲』2015年2月3日、<http://www.ettoday.net/news/20150203/462880.htm>。

<sup>8</sup> 連勝文が住む宏盛帝宝は2010年に台湾の不動産グループから台湾十大豪邸のトップと評され、世界エグゼクティブサミットでは2010年アジア十大豪邸に台湾から唯一入選した高級住宅である。（『蘋果日報』2011年8月5日、<http://www.appledaily.com.tw/appledaily/article/property/20110805/33575192/>。）

<sup>9</sup> 柯文哲の父、柯承発は新竹市東園小学校の教師だった。日本語に精通していたことから退職後、新竹工業園区内の日系企業3社の顧問を務めた。祖父の柯世元は新竹女子高等家政学校の校長だった。1947年「2.28事件」で軍側に暴行を受けた後病に倒れ、1950年に病死した。この祖父の事件があったため、柯文哲が台北市長選への出馬を表明した際、父の柯承発は息子が政界に足を踏み入れることに反対した。

<sup>10</sup> 台大医院でエイズ感染者の臓器を誤って5人に移植し、5人共エイズに感染してしまう事件が起こった。このため、当時創傷医学部主任を務めていた柯文哲は責任を取って辞任した。

<sup>11</sup> 2013年に「会計法」改正案が承認され、柯文哲を含む教授数百人らの、本来会計報告上汚職罪に当たる恐れがある公費使用が免責となった。同改正案は過去に遡って適応されるため、2010年12月31日前に各公共機関が使用した研究費や経費なども追及されない。従って、公費で私的な接待の場を設けて汚職の有罪判決を受けた顔清標前立法委員も免罪になることから、各界から批判の声が相次ぎ、この案は「顔清標条項」と名付けられた。ところが、可決された条文には「各大専院校職員」と

じたことから台北市長選挙への出馬を決意した<sup>12</sup>。柯文哲は政治素人と言われ、政治家家系というバックグラウンドも持たず、年齢も連勝文より11歳年上であるものの、率直にものを言う態度が逆にメディアの注目を浴びた。さらに、猛勉強のすえ自分の力で台湾大学に合格し、実力で台大医院の医師になったことから、その人生に奮闘する姿が台湾の人々の理想と合致した。それゆえ柯文哲は、年齢はやや上ではあるが、人々は彼に自分の気持ちを投影し自分により近いと感じた。

両者はイメージの他に選挙の軸にも大きな違いがあり、政見も異なっていた。連勝文は「台北双核心」を選挙の軸に掲げ、「振興西区」を提案して台北市内のバランスの取れた地域開発を図るとした<sup>13</sup>。さらに、世界経済が台湾を周縁化させており、首都である台北は国際性を高めて都市間競争を行うべきであると考え、自らの企業経営手腕で台北を国際都市にすると述べた。連勝文が選挙の軸に従って打ち出した政策には、台北市政の中心を西区へ移す、新生高架道路を地下化する、社子島を自由経済モデルエリアにする、投資ホールディングスを設立する、台北市第一殯儀館を南港山猪窟に移すなどの政見が含まれる。一方、柯文哲の選挙の軸は「改変」と「開放政府、全民参与」である。藍対緑の戦いから脱却し、政治を市民のために働くという原点に戻す。「開放政府、全民参与」の

---

だけ記載され、「教」の字が抜けていたため、教授は免責対象に含まれず、立法委員は公費での私的接待が免責になるが、教授はならないという状態になった。最後は総統が行政院に再審議を命じてこの事件を解決した。

<sup>12</sup> 『自由時報』2014年12月2日、<http://election.ltn.com.tw/2014/news.php?mo=1&type=breakingnews&no=1172017>。

<sup>13</sup> 連勝文は台北市で比較的発展の速い信義、大安、松山、内湖などの地域と比べ、中山、大同、万華などは見過ごされており、発展に力を入れる必要があると考えた。

理念で市民のための奉仕を実行し、市民の力を結集しインターネットなどの先進技術の活用を通じて、最少予算で最も実用的な公共サービスを提供するとした。政策面においては、食品安全、参与式予算、社会住宅、公的介護、家庭医学制度、勞工局長の労働組合による指名、台北市営バス改革、文化的自治などの新政策を多数打ち出した。ただ、残念だったことは、双方の選挙の主軸は明らかに異なっていたものの投票日の2か月前になっても焦点を絞れていなかった。またそれぞれの政策についての議論が続かず、「議題より話題」に流れがちであった<sup>14</sup>。これは双方共に相手に挑めるほど主軸が確立しておらず、さらに自ら公の場で政策議論を交わすことが少なかったことが大きい<sup>15</sup>。

双方が政見で交戦することは少なかったことが、連勝文の一部政見は政策づくりに対する思慮に欠けており、物議を醸して訂正を迫られることもあった。例えば、日本を訪問し東京都市再開発についての知見を得ると、新生高架道路の「地下化」という公約を打ち出した。しかし、高架道路の下に堀があり台湾鉄路や台湾高速鉄路、MRTの線路も突き抜けなければならず、工事の実施は全く以って不可能であることを知らないのかと各界を騒がせた。このほか、公の場で「内湖、南港は夜真っ暗で、伝統市場すらない」「社子島は北西の小島だ」などと発言し、当該地域の発展に精通していないと各界から批判を浴びた<sup>16</sup>。「台北市第一殯儀館の南港山猪窟への移転」

---

<sup>14</sup> 「社会住宅」の他に、連勝文はかつて「第一殯儀館を移転して青年住宅を建設する」ことを提案し、一度2週間近く政策議論を交わしたことはあったが、これ以外の政策はいかなる議論も行われず市民の共鳴も得られなかった。

<sup>15</sup> 『華視新聞』2014年9月5日、<http://news.cts.com.tw/nownews/politics/201409/201409051496356.html>。

<sup>16</sup> 『今日新聞』2014年7月28日、<http://www.nownews.com/n/2014/07/28/1342436>；『自

発言に至っては、住民の反発を招いただけでなく、当該地域の国民党議員まで記者会見を開き、声をそろえて反対し、連勝文は移転しないと訂正させられた<sup>17</sup>。これら政見に関する論争が巻き起こったことから、一部の市民は連勝文の台北市に対する理解度を疑い、連勝文のその他の重要政策に対しても疑問を抱いた。そして若者の連勝文に対する特権階級イメージや庶民の苦しみを知らないという印象がさらに強化されることになった<sup>18</sup>。

連勝文が公約面で優勢に立てず、また特権階級イメージから若い有権者の支持を得られず、さらには国民党に不利な状況にあったことから、連陣営の選挙戦略は旧態依然の政党対決に戻り、藍緑対立を扇って藍陣営支持者の投票意欲をかき立てようとした。台北市は本来、国民党が強い地盤であり、台北市の有権者の構造は藍が緑を圧倒する。1994年の台北市長選挙で国民党が分裂した以外は<sup>19</sup>、台北市長選挙における国民党の得票率は全て5割を超えている。台北市は藍緑対決の構図にさえ戻れば連勝文の当選確率は上がる。従って、連勝文は馬英九との関係を修復し<sup>20</sup>、馬英九とともに何度も集

---

由時報』2014年7月16日、<http://news.ltn.com.tw/news/politics/paper/796398>。

<sup>17</sup> 南港区国民党議員李彦秀、闕枚莎、呉世正および陳義洲は記者会見を開いて「第一殯儀館移転政策」に反対した。また、地方説明会を開催して火消しに回り、連勝文は現地を訪問して住民の意見を聞くべきだと指摘した。（『東森新聞雲』2014年9月2日、<http://www.ettoday.net/news/20140902/396534.htm>。）

<sup>18</sup> 『自由時報』2014年5月29日、<http://news.ltn.com.tw/news/politics/breakingnews/1019209>；『蘋果日報』2014年5月31日、<http://www.appledaily.com.tw/realtimenews/article/new/20140531/407895/>。

<sup>19</sup> 1994年の台北市長選挙は国民党が黄大洲を、新党が趙少康を推薦したことから藍陣営の票が割れ、得票率43.67%を獲得した民進党候補の陳水扁に当選を許した。

<sup>20</sup> 馬政権に対する「今は明王朝ではない」との発言に関して、連勝文は8月24日にインタビューを受けた際、当時「もっと柔らかい表現」を使うべきだったかもしれないと述べ、馬英九に対して一定の謝意を表した。また、国民党の公認候補として立

会に参加して情勢を盛り上げることで、藍陣営の支持者を呼び戻そうとした<sup>21</sup>。一方で、連陣営は柯文哲と民進党を意図的に一緒くたに扱い、柯文哲に台湾独立や92年コンセンサスなどの重大議題について、立場をはっきり示すよう求めた。さらに、初の弁論大会で柯文哲を「墨緑」と呼んだ上で国民身分証まで引き裂いたと強調し、投票日前10日間には民進党主席の蔡英文との「契約説」に猛攻撃を加え、柯文哲の「野党大連盟」は民進党が裏口上場を果たすための表看板にすぎないと指弾した。これら一連の攻撃に対し柯文哲が行った「墨緑説」に対する回答は、台湾独立志向という疑いを晴らしただけでなく、逆に連陣営側の政治的操作の失敗を浮き彫りにした<sup>22</sup>。選挙前に連陣営が猛攻撃を加えた「契約説」はもともと、記者が蔡

---

候補した後は、公の場で馬英九に何でも同調して礼儀正しい態度を取るなど、以前の馬英九を攻撃するような態度と比べるとまるで別人であった。（『今日新聞』2014年8月27日、<http://www.nownews.com/n/2014/08/27/1388102>。）

<sup>21</sup> 連勝文の「大明王朝説」は一部の国民党支持者の怒りに触れた。馬英九は投票日前の2週間、連勝文のために壇上に立ってこのことに触れ、「当事者が気にしていないのだからみんなも許してあげて欲しい。今最も重要なのは団結だ。勝文にチャンスあげよう。些細なことで大局に影響を与えるのはやめよう。棄権や無効投票をいう考えは絶対に持たないで欲しい」と述べた。（『華視新聞』2014年11月16日、<http://ppt.cc/qJ6v>。）

<sup>22</sup> 柯文哲は2010年に連勝文への銃撃事件が起きた際、自分は墨緑だと述べている。この発言が今回の選挙戦で連陣営に引用され皮肉られた。それに対して柯文哲は「当時私が自分は墨緑だと言ったのは、社会に向かってあなたの銃創が本物であると証明するためであり、台湾社会の調和のためであった。しかし今、あなたが私のことを再び墨緑だと言うのは、この社会を引き裂いており、目的は個人的な政治利益のためである」と対応。この発言は市民に肯定的に受け止められ、多くのメディアは連陣営が政治的操作に失敗したと指摘した。（『自由時報』2014年11月8日、<http://election.ltn.com.tw/2014/news.php?rno=1&type=breakingnews&no=1152494>；『中時電子報』2014年11月8日、<http://www.chinatimes.com/newspapers/20141108000374-260102>；『聯合晚報』2014年11月8日、<http://udn.com/NEWS/NATIONAL/NATS3/9052874.shtml>。）

英文の話の誤解して伝えたものであり、さらに柯文哲が公の場で自ら当初民進党と第一次予備選後に合意したという口約束の内容を説明したこと<sup>23</sup>、「契約説」が柯文哲に与える打撃は藍陣営が期待した効果が得られなかった。

国民党は柯文哲の民進党との関係を攻撃したほか、人格や品行に対しても攻撃を加えた。同党はまず、柯文哲の女性蔑視的な発言をやり玉に挙げた。柯文哲の失言は確かに支持率の低下を招いた<sup>24</sup>。続いて、台大医院にMG149という口座を私的に設け、医師や看護師のマネーロンダリングや脱税に協力していた疑いがあると告発した。これに対し、柯文哲は選挙費用、所得、財産、外科ICUの個人帳簿、18年間の所得税源泉徴収票を公開し、自身の潔白を証明した。柯文哲が証拠を提示したことで支持率には大きな影響を及ぼさず、4割以上の市民が彼の潔白を信じた<sup>25</sup>。投票日1週間前になると、連陣営は攻撃の矛先を再び台大医院と柯文哲に向けた。台大医院で以前、医療倫理に反して脳死と判定されていない患者に薬物とECMO (Extracorporeal membrane oxygenation)を使用して臓器の摘出を行ったのではとの疑いを持ち出したのだ。この「臓器不当摘出説」は医学界と臓器提供者の家族から強い反発を招き、かつて馬政権の任期中に衛生署長を務めた林芳郁と葉金川でさえ、臓器移植の議論を持

---

<sup>23</sup> その約束の内容には民進党市議員の選挙を応援すること、民進党が柯文哲の人事に干渉しないこと、当選後民進党市聯誼会に参加することが含まれる。

<sup>24</sup> 活字メディアが8日発表した世論調査結果によると、柯文哲の国民党台北市長候補連勝文に対するリードはたったの7.05%だった。さらに「未来事件交易所」が発表した2014年台北市長当選者の最新予測によると、連勝文の得票率は49.2%で、柯文哲の48.3%を上回った。

<sup>25</sup> TVBS世論調査によると、柯文哲の潔白を信じる市民は42%、信じないとの回答は17%、意見なしは41%だった。また、三立新聞が行った世論調査では信じるが5割を超え、信じないは2割にも満たなかった。

ち出すのは選挙戦のテーマからかけ離れていると避難した<sup>26</sup>。国民党市議会議員の楊実秋もこの議論は連勝文の情勢にまったくプラスにならないと述べた<sup>27</sup>。総じて連陣営の度重なるネガティブキャンペーンは柯文哲にとって大した痛手とならず、各種世論調査では柯文哲が終始リードしていた。

連陣営の度重なる強力な攻撃にもかかわらず、柯文哲はなぜ連陣営が期待していたほどの大きな打撃を受けなかったのだろうか。その理由は、柯文哲の誠実かつ率直な人柄や「藍緑超越」という理念が人々に認められたからである。そしてもう1つ、新しいメディアを活用して選挙戦を戦ったことも大きい。柯文哲は政治素人であり政党の後ろ盾も莫大な選挙資金援助もない。そこで、あらゆる選挙運動の中でもエネルギーのほとんどをインターネット上に割いた。その運用方法は大きく2つのカテゴリーに分けられる。1つ目のカテゴリーにはこれまでになかった選挙戦術が5つ含まれる。その5つのうち、1つ目はLINEのグループ機能の利用である。作業の効率を上げるため同機能を使って随時会議が開けるようにした。2つ目に、少額の資金提供を募ることで皆に選挙に参加してもらうため、クラウドファンディングを利用した<sup>28</sup>。3つ目に、GitBookで作成した市政白書を公開し、双方向のメッセージ機能を設けた。4つ目に、公式サイト(API(Application Programming Interface))を公開し、プログ

---

<sup>26</sup> 『蘋果日報』2014年11月21日、<http://www.appledaily.com.tw/appledaily/article/headline/20141123/36224669/>; 『三立新聞網』2014年11月23日、<http://www.setn.com/vote/News.aspx?NewsID=49477&PageGroupID=24>。

<sup>27</sup> 『三立新聞網』2014年11月22日、<http://www.setn.com/News.aspx?PageGroupID=6&NewsID=49372>。

<sup>28</sup> 柯文哲は「透明開放」の原則を力行し、選挙運動期間中に経費の収支を率先して公表した。また、台北市の法定選挙運動費用の8,700万元に達した時、寄付の受け付けを停止した。

ラマーや開発者が柯文哲の公式ウェブサイトを好きなように作成できるようにした<sup>29</sup>。5つ目は30項目の公約を映像化してYoutubeにアップし視覚化したことである。次に、カテゴリーの2つ目としてソーシャルメディアを利用した。柯文哲はまず「青年海選計画」というプロジェクトを推進し、ネット上で選挙チームに加入してくれる人材を募った。同プロジェクトは一方で柯文哲自身の宣伝にもなり、また選挙の主軸である「全民参与」の実践にもなった。次にフェイスブックを自身のパーソナルメディアとし、フェイスブックを通じて市民との交流を図った。また、情報技術チームを招いてネット世論をモニターしてもらうと共に、具体的な対応案の提供もお願いした。同チームはフェイスブックのコメント、いいね！およびシェアのモニターの他、公式サイトのアクセス数、YouTubeのキーワード、クラウドファンディングによる資金提供者の身分、所在地などのチェックも担っており、ビッグデータから戦略分析を行った。この最も典型的な例がMG149口座問題である。この問題は国民党立法委員の羅淑蕾が9月10日、MG149口座に問題があると告発したことに始まる。柯文哲側は当初冷静に処理しようと考えていたが、その後ネットデータを分析したところ、柯文哲に関する文章のうちの60%がMG149問題に関するもので、柯陣営が訴える政見に関する討論は20%にも満たないことが分かった。そこで戦略を急遽変更し、ネットユーザーに好評なキーワードである「公開、透明、開放」から出発しようと、記者会見を開いて自らの潔白を証明した。このた

---

<sup>29</sup> 公式サイトは同時にネット上の選挙事務所総本部とし、あらゆる情報発表、政見更新内容のまとめ、ニュースや事件への回答説明、活動報告およびクラウドファンディングなどを同サイト上で行うとした。（『報橘』2014年12月25日、<http://buzzorange.com/2014/12/25/kps-internet-election-strategies-1/>。）

め、効果的にマイナスのコメントを減らすことができた<sup>30</sup>。

柯文哲が新しいメディアを柔軟に活用したのに対し、連勝文は従来型メディアに依存してネットユーザーの存在を見落としただけか敵視さえした。連勝文はメディアの専門家を選挙チームに多数招き、外部からは「大連艦隊」<sup>31</sup>と称賛された。そして多額の経費を投じてテレビCMを流し、新聞広告を出し、チラシを印刷した。しかし、連陣営のネット運営は明らかに消極的かつ友好的ではなく、選挙対策委員長の蔡正元立法委員は、緑陣営をほのめかすネット軍（網軍）が連勝文を攻撃し続け民主を破壊しているとさえ述べた<sup>32</sup>。柯文哲とは対照的に、連陣営のメディア戦略はあまりにも古過ぎると各界から批判を受け、若者層の票を取り込むことができなかった<sup>33</sup>。

### 三 2014年台北市長選挙の結果

台北市長選挙は投票率70.46%で、柯文哲が得票数85万3,983票、得票率57.15%で当選を果たした。柯文哲は台北市で16年間続いた国民党支配を終わらせ、憲法改正後初の無所属の台北市長となった。一方、国民党候補の連勝文の得票数は60万9,932票にとどまった。

---

<sup>30</sup> 柯陣営がMG149案件について反撃を行った後、MG149に関する議論はピーク時の80%から10%にまで激減した。（『東森新聞雲』2014年12月3日、<http://www.ettoday.net/news/20141203/434258.htm>。）

<sup>31</sup> これらのメンバーには台北市前新聞局長の游梓翔、ベテランジャーナリストである秦蕙媛、単厚之、および前聯合報記者の錢震宇が含まれており、メディアの経験が豊富なプロフェッショナルばかりであった。

<sup>32</sup> 『東森新聞雲』2014年8月6日、<http://www.ettoday.net/news/20140806/386778.htm>。

<sup>33</sup> 国民党市議員の秦慧珠と鐘小平は、連勝文の選挙運動スタイルはあまりにも古く、選挙チームメンバーの年齢も高いと述べ、もっと若いメンバーを増やさなければ、40歳以下の民意に近づくことはできないとの考えを示した。（『台湾醒報』2014年7月13日、<https://anntw.com/articles/20140713-1A1q>。）

「野党大連盟」の柯文哲は1998年に陳水扁が台北市長に当選した際に獲得した得票率46%の記録を破っただけではなく、無党派層の票も取り込み、さらには一部の「泛藍」（汎国民党陣営）支持者の票も獲得するなど、台北市の政治勢力図を大幅に塗り替えた。

**表1 2010年、2014年台北市長選挙における12行政区の得票率**

党籍 候補者	2010年		2014年	
	国民党 郝龍斌	民進党 蘇貞昌	国民党 連勝文	無所属 柯文哲
北投区	50.8%	48.7%	36.8%	61.2%
士林区	48.6%	50.9%	35.6%	62.6%
内湖区	58.2%	41.3%	41.3%	56.6%
南港区	55.0%	44.4%	39.6%	58.2%
松山区	59.0%	40.5%	43.9%	54.1%
信義区	59.5%	39.9%	44.0%	53.9%
中山区	52.1%	47.4%	38.4%	59.8%
大同区	41.9%	57.6%	31.2%	67.1%
中正区	59.2%	40.2%	42.7%	55.2%
万華区	49.8%	49.7%	38.6%	59.7%
大安区	62.0%	37.5%	45.6%	52.4%
文山区	65.1%	34.3%	47.8%	49.9%

(出典) 中央選挙委員会選挙資料庫 (<http://db.cec.gov.tw/>)

得票率を台北市の12行政区別で見ると、表1で示すように今回の選挙で国民党は全ての行政区で敗北した。以前なら藍陣営の鉄板区とみなされた大安や文山などでさえ敗北を喫した。また、連勝文は党内予備選で戦った立法委員の丁守中が地盤とする士林と北投でそれぞれ35.6%と36.8%しか得られなかった。南港は連陣営の選挙

対策委員長である蔡正元立法委員の選挙区であるが、得票率はわずか39.6%だった。一方、柯文哲は全ての行政区で過去最高得票数を獲得しただけでなく、士林、北投、中山、大同および万華では連勝文に得票率20%以上の差をつけて圧勝した。前回の選挙結果と比較すると、国民党は今回、内湖、中正、大安および文山など従来の鉄板区で惨敗し、得票率は16%以上も下がった。一方、柯文哲の同4区での得票率は、前回の市長選に出馬した民進党の蘇貞昌をそれぞれ15%前後上回った。つまり、柯文哲は台北市の12行政区で全勝し、国民党の鉄板区である台北市でも揺り動かすことが不可能ではないことを示した。

## 四 国民党の敗因

### 1 馬英九政権の施政への不満

今回、国民党が敗北を喫したのは、馬英九政権の施政への不満が原因と考えられている。今回の地方選挙で国民党は、台北市で大敗しただけでなく、その他の縣市でも惨敗だった。長期にわたり国民党が執政してきた桃園市、台中市でも基礎票を守れず、全22県市中6縣市を保ったのみだった。6直轄市では新北市のみ国民党の現職、朱立倫が再選を決めたものの、民進党候補の游錫堃との差はたったの2万4,000票と接戦を強いられた<sup>34</sup>。今回の選挙結果は馬英九政権への不信任であると言える。

---

<sup>34</sup> 投票前朱立倫の支持率は游錫堃から大幅なリードを保っており、投票日の1か月前も朱立倫の支持率が游錫堃を21%上回っていたため、誰もが国民党が新北市で大勝すると予測していた。（「新北市長選前一個月民調」『TVBS 民意調査中心』2014年10月29日～11月3日、[http://home.tvbs.com.tw/static/FILE\\_DB/PCH/201411/20141105153919282.pdf](http://home.tvbs.com.tw/static/FILE_DB/PCH/201411/20141105153919282.pdf)。）

馬政権が世論の支持を得られない主な原因は、洪仲丘事件<sup>35</sup>、食品安全問題<sup>36</sup>、頂新国際集団の守り神だとの批判、ひまわり学生運動、および国民党内部での馬英九と王金平の争いなど、近年重大事件が多発したことにある。馬政権はこれらの問題を適切に処理せず、民意に耳を傾けずに多くの市民を失望させた。図1は2012年から2014年までの馬英九総統の施政に対する満足度を示している。ここから馬政権の施政に対する不満足度が常に6割以上に上っていることが分かる。2013年6月21日、台湾の海峡交流基金会および中国の海峡兩岸関係協会が兩岸サービス貿易協定に調印し<sup>37</sup>、大きな論争を引き起こした。一部の市民の間ではサービス貿易協定の効果は限定的で、かつ台湾の零細企業が深刻な生存の危機に直面し、また更に多くの資金、人材、技術が中国へ流出するのではないかと心配の声が上が

---

<sup>35</sup> 2013年7月、当時兵役義務に就いていた洪仲丘が軍内でいじめを受けて死亡したにもかかわらず、国防部はその真相をなかなか明かさなかったことから国民の怒りを買った。多くの国民が自発的に抗議運動に参加して真相究明と軍内改革を訴えた。

<sup>36</sup> 2013年10月、大統長基会社の食用油偽装事件が発生した。業者は低コストのひまわり油と綿実油を混入した製品をエキストラヴァージンオリーブオイル100%と偽って暴利をむさぼっていた。頂新国際集団は大統から油製品を購入しさらにそれを再包装して販売していたが、その製品に問題があることを知っていながら報告していなかった。2014年にも食用油事件が発生した。強冠会社が「屏東郭烈成工廠」が回収、処理した食用油の廃油、再生油を購入し、これら質の悪い油33%をラード67%に混入して「全統香猪油」を製造していた。この廃油ラードは多くの有名な菓子業者に販売していたことから、多くの国民がそれを使って製造された食品を口にしていたことが分かった。

<sup>37</sup> 上海で行われた会談でサービス貿易協定が締結された。中国側は80項目、台湾側は64項目を開放する。開放分野は商業、通信、建設、旅行、娯楽文化、体育、運輸および金融などに及ぶ。しかしこの協定は台湾社会内部に大きな論争を引き起こした。民進党が審議をボイコットしただけではなく、与党内部でも意見が分かれているようだ。（陳先才「服貿協議爭議的背後」『美麗島電子報』2013年7月3日、<http://ppt.cc/3pgA>）。

った<sup>38</sup>。これらの憂慮が原因となり馬英九への不満足度は初めて7割を突破した。2013年9月、立法院院長である王金平の司法介入疑惑が持ち上がった。馬英九は判決がまだ出ていないにもかかわらず、党内手続きを踏んで王金平の党籍剥奪を決定した<sup>39</sup>。これにより国民党内部は馬擁護派と王擁護派に分裂したが、このとき、連戦・国民党名誉主席の長男、連勝文は馬英九を公に批判した<sup>40</sup>。王金平に対する党籍剥奪は国民党の内部闘争と受け止められ、馬英九の印象が悪くなったことから、満足度は過去最低の11%にまで落ち込んだ。2014年3月、「ひまわり学生運動」が勃発した。これは国民党の張慶忠立法委員が『海峡兩岸サービス貿易協定』の審議を30秒で打ち切ったことから、一部学生の間で反発が広がったもので、学生たちは立法院を占領、包囲して軽率な審査手続きに抗議した。馬英九総統は市民の抗議活動が6日目に入った時、国内外に向けて記者会見を開き、再度協定の撤回を否定した。このような強硬姿勢が更に多くの若者の政府への不満を呼び起こし<sup>41</sup>、馬英九総統に対する不満足度は7割を突破した。統一地方選挙投票日の1か月前、頂新国際集団が食用油に飼料油脂などを混入していることが再び発覚した。一部メデ

---

<sup>38</sup> 『自由時報』2013年9月9日、<http://news.ltn.com.tw/news/politics/paper/712247>。

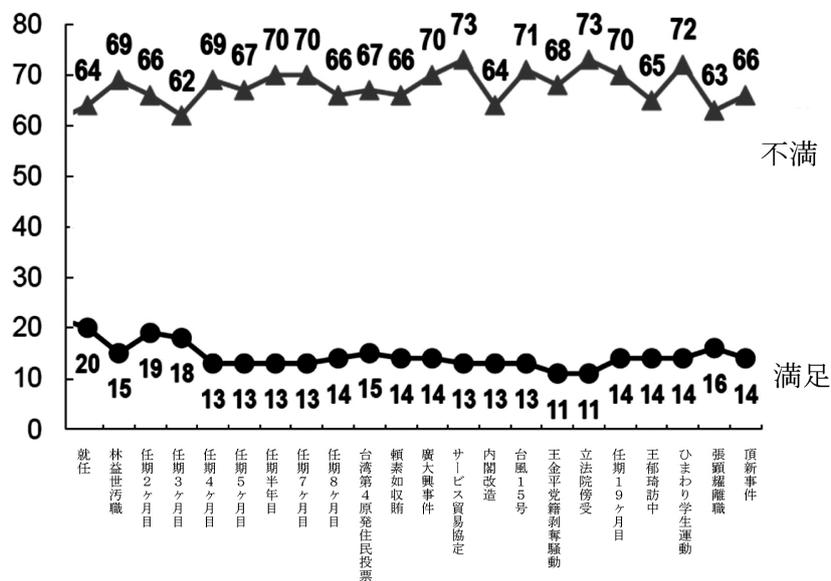
<sup>39</sup> 台湾で立法委員の選挙において採用される選挙制度は単一選区両票制。(小選挙区比例代表並立制)であることから、王金平は党籍を剥奪されると立法委員資格が喪失し、同時に立法委員長の資格も失う。

<sup>40</sup> 連勝文は「今は民国102年で、『明王朝』ではない。誰も法律を超えることはできず、総統でも例外ではない。判決が出る前に先に追い出すなんて本当に悲しい」と馬英九を批判した。(『東森新聞雲』2013年9月12日、<http://www.ettoday.net/news/20130911/269076.htm>。)

<sup>41</sup> ひまわり学生運動が10日目に入った時、学生代表の林飛帆は馬英九総統に「抗議活動に終わりはない。終わる時は馬政府が降伏した時だ!」と叫んだ。(『東森新聞雲』2014年3月27日、<http://www.ettoday.net/news/20140327/339943.htm#ixzz3O7PSng00>。)

ィアは馬英九を「頂新グループを経営する魏家の最大の守り神」または「馬派閥は頂新から10億元の政治献金を受け取っている」<sup>42</sup>などとのめかした。この事件により馬政権の施政に対する不満足度は高止まりしたままとなった。

図1 馬英九總統の施政に対する満足度（2012年6月～2014年10月）



(出典) TVBS 民意調査中心 ([http://home.tvbs.com.tw/poll\\_center](http://home.tvbs.com.tw/poll_center))

## 2 藍緑対立を超越した市民の力の台頭と世代交代に対する軽視

国民党にとってもう1つの脅威は藍緑対立を超越した市民の力の台頭と世代交代であった。投票半年前にひまわり学生運動が起こったが、その背後に込められている基本理念は世代間倫理、社会階級

<sup>42</sup> 『東森新聞雲』2014年10月22日、<http://www.ettoday.net/news/20141022/416633.htm>。

の流動性、および資源の分配的正義などの課題における基本的価値であり、この運動によってこうした基本的価値が藍緑対立という従来の考えを超える契機となった<sup>43</sup>。つまり、ひまわり学生運動は台湾の人々の公民意識を呼び起こし、多くの市民により深い社会的価値という議題に目を向けさせ、また市民の力を結集して選出議員を監督するという効果が生まれた。一方で、学生主導のひまわり学生運動は世代交代という課題も突きつけた。世界経済が低迷し貧富の差が拡大する中、若者は自分の将来に不安を感じている。そんな中ソーシャルメディアの出現が集団行動のコストを下げ、若者が社会活動に参加して自分たちの権利を守ろうという意欲を高めた。従って、同運動後、多くの市民の社会活動に対する論理的思考はもはや以前のような藍か緑かのイデオロギー最優先ではなくなった。経済成長と所得分配の不平等、貧富の差の拡大、特権階級の長期にわたる資源的優位性かつ階級流動性の低さ、および高失業率など、問題が山積する社会で生活しているが、政府にはこれらの問題を解決する能力がない。ならば自分あるいは次の世代は如何に身を落ち着け心のよりどころを得ればいいのか。これが運動後の最優先課題となったことがひまわり学生運動の深層意義である。これらの問題は若者世代が真っ先に直面することから、彼らは強い動機付けにより分配的正義の価値観で政治的選択を行い、自分たちの権利と利益を守るため関連運動に参加したのである。

柯文哲の勝利の鍵は藍緑対立を超越し、徐々に目覚めた公民意識の受け止めに成功したことである。柯文哲は予備選の世論調査で民進党候補の姚文智を打ち破って選挙に立候補したが、選挙運動に藍

---

<sup>43</sup> 陳朝建「國民黨的明天過後」『兩岸公評網』2014年12月1日、<http://www.kpwan.com/news/viewNewsPost.do?id=1043>。

緑対決を持ち込まなかった。それどころか多くの人々が藍緑対決に嫌気がさしていることに気づいていた彼は、民進党中央と意識的に距離を置き、自身を「非国民党」を統合する反対勢力と位置づけた。そこで、まず、新党出身の姚立明を選挙対策本部の総幹事として招聘し、国民党以外のいかなる市議会議員候補の選挙応援も行うと公言した。次に、ひまわり学生運動がもたらした衝撃および公民意識の目覚めに鑑み、庶民、郷民、公民の「新三民主義」を打ち出し、また党派を問わず同じ志を抱き、社会、政治に関心のある青年に選挙チームに参加してもらおうと「青年海選計画」と銘打った募集活動を進めた。そして最後に、柯文哲は当選後も政党に加入せず、一級主管も政党の活動に従事させず、藍緑対立の超越のスタンスを行動で示すと表明した。

一方で、これら新しい課題が生まれる中、国民党は若者の政治理念の変化に気づかず、政治面に関しては藍緑対立の選挙戦スタイルのままに止まっており、経済面に関しては2012年の総統選挙で打ち出された兩岸経済政策を真似ているだけであった。藍緑対決に持ち込んで外省人グループや軍人、公務員、教職員などの票を確保するため、国民党は無所属候補である柯文哲を意図的に民進党と結びつけて扱った。蔡正元、羅淑蕾から連戦、郝柏村までが行った皇民説も藍緑対決を引き起こす目的であった。連戦はさらに投票日前日に開催された集会で「明日の選挙はただの首都防衛戦ではない。長年にわたる藍と緑、統一と独立、国民党と民進党の対峙だ」と叫んだ<sup>44</sup>。経済面では国民党は「中韓 FTA カード」を執拗に持ち出し、投票日前に登場した広告では民進党が FTA 締結のチャンスを逃したために

---

<sup>44</sup> 『蘋果日報』2014年11月28日、<http://www.appledaily.com.tw/realtimenews/article/new/20141128/515058/>。

韓国を喜ばせる結果になったと強調した<sup>45</sup>。このほか、フォックスコン・テクノロジー・グループ（鴻海科技集団、Foxconn Technology Group）の郭台銘董事長が投票日前、国民党候補の選挙応援に北から南まで精力的にまわり、候補者と写真を撮って選挙の看板にした。郭台銘はさらに、藍陣営の候補者が当選した暁には投資を増やすと約束し、経済層への国民党支持を呼びかけた。つまり、国民党は「ひまわり学生運動」の後も市民の力の台頭および世代交代の態勢に気がつかず、民意に耳を傾けなかった結果、今回の選挙でもこれまでと同様に従来の藍緑対決や経済界への揺さぶりという戦略を取り、有権者の反感を買った。連陣営と国民党が選挙戦を常に藍緑対決に引き戻そうと苦慮していたのに比べ、柯文哲の藍緑対立超越戦略は明らかに上手であり、これも重要な勝因の1つである。

### 3 候補者の世襲に対する不満

全体的な情勢や政党の評判が国民党候補にとって不利な場合、国民党候補は地方選挙において個人的なイメージや実力で有権者を引きつける。従って、政治環境が国民党にとって不利で、基礎票が逃げてしまう危険があっても、国民党候補個人に対する有権者の好感度が他の候補者より高ければ、相当程度の勝算が見込める。ということは、国民党候補個人の好感度が他の候補者より低い上、基礎票の流出が起きれば惨敗は必至だ。

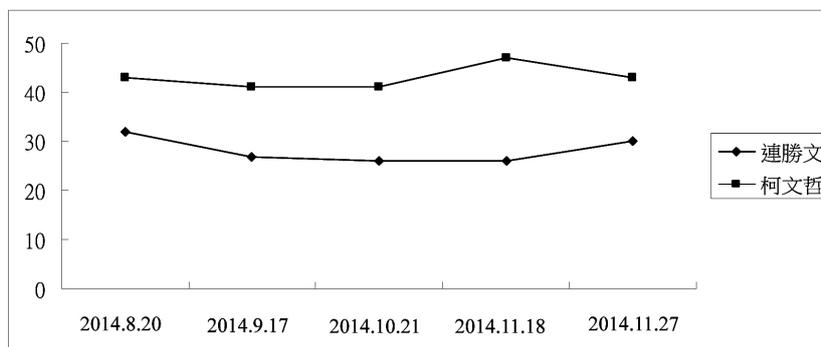
今回の台北市長選挙で最も鮮明だった候補者イメージの争いは特権階級と庶民の対立である。連勝文は特権階級と見られ、柯文哲は庶民を自任していた。連勝文の長年の特権階級イメージは現在の分配的正義の価値観の中では劣勢であり、若者世代には特に嫌われて

---

<sup>45</sup> 『民視新聞』2014年11月27日、<http://ppt.cc/9Tgg>。

いる。そこで、特権階級イメージを急いで払拭しようと彼の側近がシリーズ広告を展開したが<sup>46</sup>、評価は好転しなかったばかりか、若者世代にターゲットをしばった『もしもあなたが金持ちだったら』というテレビCMを流したところ、ネットユーザーからは金持ちであることを公然とひけらかしていると思われ<sup>47</sup>、8月に41%あった若年層の連に対する支持率は9月には19%にまで急落した<sup>48</sup>。図2は投票日3か月前の連勝文と柯文哲に対する好感度調査である。この表から、アンケートに答えた有権者の中で、連勝文を嫌いな市民が柯文哲を常に上回っていたことが分かる。反対に、柯文哲の庶民的で近

図2 有権者の連勝文、柯文哲に対する好感度（2014年8月20日～11月27日）



(出典) TVBS 民意調査中心 ([http://home.tvbs.com.tw/poll\\_center](http://home.tvbs.com.tw/poll_center))

<sup>46</sup> 連陣営は連勝文の特権階級イメージを払拭するため「お釈迦様は特権階級から衆生をかけられた」「私を知っていますか?」「金持ちだったらどうする?」など、たくさんの広告を展開したが、その内容の誤りをネットユーザーに指摘され逆効果となった。

<sup>47</sup> 『蘋果日報』2014年9月11日、<http://www.appledaily.com.tw/realtimenews/article/new/20140911/467621/>。

<sup>48</sup> 『東森新聞雲』2014年9月20日、<http://www.ettoday.net/news/20140920/403641.htm>。

寄りやすいイメージ、および率直で決断力のある性格は、より多くの有権者を引きつけ、柯文哲に好感を持つ人は常に4割を超えていた。バックグラウンドは連勝文の方が優位にもかかわらず、選挙戦は苦戦を強いられた。

#### 4 若年層の現状に対する不満が反対陣営への支持に転化

有権者数に占める若年層の割合は相当高いため、投票率が高い場合若者票が選挙結果に与える影響は軽視できない。内政部の2014年10月末の統計によると、20歳から29歳までの若者人口は31万2,013人である。また、今回の台北市長選挙で初めて選挙権を持ったいわゆる「首投族」<sup>49</sup>が、台北市の総投票者数210万に占める割合は5.59%だった。この他、台湾の長年にわたる投票状況に基づくと、投票率の最も低い年齢層は30歳から39歳までの有権者である。この年代は忙しく、多くの人々が家庭との両立が必要であるため、投票コストが比較的高くなる。次に低いのは20歳から29歳の若者で、その理由は地域外での就学、兵役などにより帰省投票が難しいためと考えられる<sup>50</sup>。若者世代の得票数を伸ばすことに成功すれば、選挙結果に影響を与えられることは間違いない。今回の選挙では投票日の前後の期間に台湾高速鉄道が学割運賃を導入したが<sup>51</sup>、ここから若者世代の投票数の重要性が伺える。図3を見ると、投票前に柯文哲への支持を表明した有権者は40歳以下が多いことが分かる。つまり、柯文哲が新しいメディアやソーシャルネットワークを利用して行った若

---

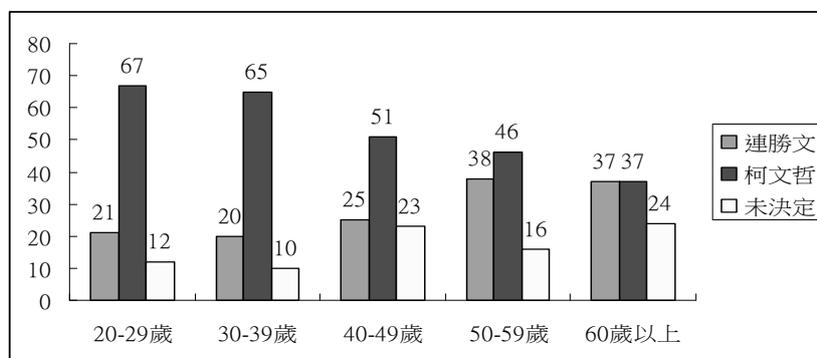
<sup>49</sup> 満20歳から23歳までが「首投族」に当たる。

<sup>50</sup> 『蘋果即時新聞網』2014年11月20日、<http://www.appledaily.com.tw/realtimenews/article/new/20141120/510210/>。

<sup>51</sup> 『民報』2014年11月17日、<http://www.peoplenews.tw/news/6086b6ae-f57b-4843-8640-172a5b9c4cdb>。

い有権者の動員や宣伝活動は、明らかに効果をもたらしている。さらに重要な勝利の鍵は、ここ2年近くの支持の高い公民運動により高まった政治への熱意を若者の投票意欲にまで高め、またインターネット上での支持を実際の投票数へと変えたことにある。

図3 回答者の年齢と台北市長の支持率（2014年11月18日）



(出典) TVBS 民意調査中心 ([http://home.tvbs.com.tw/poll\\_center](http://home.tvbs.com.tw/poll_center))

## 五 結論-2014年台北市長選挙結果と今後の政治的發展

台北市長選挙結果の結果は無所属の柯文哲が勝利した。その背後には大きな意義を備えている。まず、柯文哲が訴えた「藍緑超越」という政治理念が、大多数の台北市民に明らかに受け入れられたことである。今回国民党は選挙戦を藍緑対決路線に持ち込もうとしたが、その結果自身の鉄板区さえ守れなかった。故に、藍緑両陣営は今後選挙の際には、国民が藍緑闘争に嫌悪感を抱いていることを考慮する必要がある。次は、今回の選挙結果は国民の馬英九政権に対する不信任であったということである。馬政権はどうすれば国民の期待に応えられるのか。当面の重要課題である貧富の差、官民結託、

食品安全および民主統治と分配的正義などの問題を直視しなければならない。もう1つは、柯文哲が選挙の新しい成功モデルを創造したことである。今回の選挙で柯は選挙区を回らず、旗やのぼりを立てず、自発的に寄付の受け付けを停止した。また、クラウドファンディング、理念の拡散、活動の発起、およびビッグデータを分析して戦略を練るなど、インターネットとソーシャルメディアを活用して選挙戦を主導した。小額な選挙資金で市民の知恵を結集したインターネット技術の選挙でも、大金を使って作成した従来メディアを使った宣伝モデルに勝てることを示した。最後に、「柯文哲現象」は市民の力、馬政権への不満、藍緑超越、世代と分配的正義、勇気ある改革などを含む各種民意をとりまとめたさまざまな社会的勢力の総和とすることができる。今後いかなる政治家もこの力を直視し民心から離れた決定を避けなければならない。

今回の選挙結果が今後の政治発展に及ぼす影響について、注目すべき点が大きく3つある。1つ目は国民党の失敗、ポスト馬英九時代の到来が、国事、国民党党務および兩岸交流に影響を与えるということである。国事については、馬英九総統は残り1年半の任期中にレームダック化が進むことは避けられず、いかに行政チームを結束させて政策を効果的に進め、目下の政策議論を解決するかが1つの大きな課題となる。国民党党務については、今回馬英九は敗北の責任を取って国民党主席を辞任し、代わって6直轄市で唯一、国民党籍で当選を果たした朱立倫が党主席を引き継いだ。この人事は2016年の総統選候補者選に及ぼすだろう。今回新北市長の再任を果たした朱立倫は1年後に総統選に立候補するのか、各界の注目が集まっている。兩岸交流については、国民党勢力の深刻な打撃が馬英九と連戦の中国大陸での発言力に影響を与えることは必至で、今後兩岸の政治交流がどう運営されていくのか、注目に値する。

注目すべき点の2つ目は、民進党と柯文哲の間に協力と競争の関係が存在するかということである。政治議題において民進党と柯文哲は互いに手を結ぶのだろうか。台北市議会において民進党の市議会議員は柯文哲市長を前にどのように対話するのだろうか。そして3つ目は、無所属の政治素人である柯文哲が圧倒的な支持を得て当選したことである。この藍緑超越の力は多くの第三勢力に次々と新しい政党の結成を促すだろう。しかしながら、台湾は長年にわたり藍緑の政治構造を形成し、立法委員選挙では単一選区両票制（小選挙区比例代表並立制）が採用され、また得票率5%以下の政党は議席を獲得できないことから、小さな政党は統合し且つ大きな政党に譲歩しなければ立法委員選挙で勝つことはできない。このため、今後の政党政治はさらに多くの妥協とコミュニケーションという課題に直面するだろう。

（寄稿：2015年2月2日、採用：2015年2月26日）

翻訳：西方亜希子（フリーランス翻訳者）

## 2014 年台灣台北市長選舉分析

湯晏甄

(台灣大學政治學系博士)

張傳賢

(中央研究院政治學研究所助研究員)

### 【摘要】

2014 年 11 月 29 日台灣舉辦史上最大規模的地方選舉，其中，台北市長選舉備受各界矚目。國民黨面臨馬英九施政滿意度低迷的危機、又歷經洪仲秋事件、太陽花學運等公民運動的衝擊、世代與分配正義價值觀的興起，加上高人氣的台大醫師柯文哲來勢洶洶的挑戰，使得國民黨在長期執政的台北市出現選情緊繃。雙方在競選過程展開激烈角力，從候選人形象對比、競選主軸、負面攻擊，到新舊媒體之戰，都與過去選舉有很大的不同。連勝文的權貴形象與當前分配正義的價值觀格格不入；相對地，柯文哲的平民形象與超越藍綠的政治理念受到較多民眾青睞。此外，柯文哲首次使用新媒體與資訊科技的競選宣傳方式，不僅落實「全民參與」的競選主軸，也成功化解各項負面攻擊。最後，無黨籍的柯文哲擊敗連勝文而當選台北市長，選舉結果造成台北市政治版圖巨幅震盪。

**關鍵字：**2014 選舉、太陽花學運、施政滿意度、新媒體

## **An Analysis of the 2014 Taipei Mayoral Election in Taiwan**

*Yen-Chen Tang*

Ph.D. National Taiwan University

*Alex C. H. Chang*

Assistant Research Fellow, Institute of Political Science, Academia Sinica

### **[ Abstract ]**

On November 29, 2014, Taiwan held the largest local elections in its history, with the race in Taipei City receiving particular attention. The ruling Kuomintang (KMT) faced a crisis marked by the confluence of President Ma Ying-jeou's low approval ratings, the impact of civil movements following the death of Army Corporal Hung Chung-chiu as well as the Sunflower Student Movement, and the emergence of new values concerning generational and distributive justice. Combined with the popularity of the opposition candidate, National Taiwan University Hospital physician Ko Wen-je, these factors produced a tight election in Taipei City, where the KMT had long been in a dominating position. The fierce electoral competition between the two sides was unprecedented, with the starkly contrasting images of the candidates, campaign themes, negative attacks, and the war between new and old media marking very different trends from past elections. Many people perceived the elite image of the KMT candidate Sean Lien as out of step with the new values of distributive justice, but favored Ko as an ordinary citizen and his political philosophy that moved beyond the classic "blue-green" party-lines divide. In addition, Ko pioneered the use of new media and informational technology campaigning, putting into practice

the idea of “public participation” throughout his campaign while also successfully neutralizing negative attacks. In the end, Ko defeated Lien to become Taipei City mayor, producing a huge shock for the city’s traditional political establishment.

**Keywords:** 2014 elections, Sunflower Student Movement, Presidential Approval Ratings, New Media

**〈参考文献〉**

- 「中央選挙委員会新聞稿」中央選挙委員会、[http://web.cec.gov.tw/files/15-1000-24146\\_c4133-1.php](http://web.cec.gov.tw/files/15-1000-24146_c4133-1.php)。
- 「新北市長選前一個月民調」『TVBS 民意調查中心』2014 年 10 月 29 日～11 月 3 日、[http://home.tvbs.com.tw/static/FILE\\_DB/PCH/201411/20141105153919282.pdf](http://home.tvbs.com.tw/static/FILE_DB/PCH/201411/20141105153919282.pdf)。
- 『TVBS 民意調查中心』、[http://home.tvbs.com.tw/poll\\_center](http://home.tvbs.com.tw/poll_center)。
- 『三立新聞網』2014 年 11 月 22 日、<http://www.setn.com/News.aspx?PageGroupID=6&NewsID=49372>。
- 『三立新聞網』2014 年 11 月 23 日、<http://www.setn.com/vote/News.aspx?NewsID=49477&PageGroupID=24>。
- 『中央社』2013 年 11 月 13 日、<http://www.cna.com.tw/news/aCN/201311130219-1.aspx>。
- 『中時電子報』2014 年 11 月 8 日、<http://www.chinatimes.com/newspapers/20141108000374-260102>。
- 『今日新聞』2014 年 7 月 28 日、<http://www.nownews.com/n/2014/07/28/1342436>。
- 『今日新聞』2014 年 8 月 27 日、<http://www.nownews.com/n/2014/08/27/1388102>。
- 『台灣醒報』2014 年 7 月 13 日、<https://anntw.com/articles/20140713-1A1q>。
- 『民報』2014 年 11 月 17 日、<http://www.peoplenews.tw/news/6086b6ae-f57b-4843-8640-172a5b9c4cdb>。
- 『民視新聞』2014 年 11 月 27 日、<http://ppt.cc/9Tgg>。
- 『自由時報』2013 年 9 月 9 日、<http://news.ltn.com.tw/news/politics/paper/712247>。
- 『自由時報』2014 年 11 月 8 日、<http://election.ltn.com.tw/2014/news.php?mo=1&type=breakingnews&no=1152494>。
- 『自由時報』2014 年 12 月 2 日、<http://election.ltn.com.tw/2014/news.php?mo=1&type=breakingnews&no=1172017>。
- 『自由時報』2014 年 5 月 29 日、<http://news.ltn.com.tw/news/politics/breakingnews/1019209>。
- 『自由時報』2014 年 6 月 17 日、<http://news.ltn.com.tw/news/focus/paper/788206>。
- 『自由時報』2014 年 7 月 16 日、<http://news.ltn.com.tw/news/politics/paper/796398>。
- 『東森新聞雲』2013 年 9 月 12 日、<http://www.ettoday.net/news/20130911/269076.htm>。
- 『東森新聞雲』2014 年 10 月 22 日、<http://www.ettoday.net/news/20141022/416633.htm>。
- 『東森新聞雲』2014 年 12 月 3 日、<http://www.ettoday.net/news/20141203/434258.htm>。
- 『東森新聞雲』2014 年 3 月 27 日、<http://www.ettoday.net/news/20140327/339943.htm#ixzz3O7PSng00>。
- 『東森新聞雲』2014 年 8 月 6 日、<http://www.ettoday.net/news/20140806/386778.htm>。
- 『東森新聞雲』2014 年 9 月 20 日、<http://www.ettoday.net/news/20140920/403641.htm>。
- 『東森新聞雲』2014 年 9 月 2 日、<http://www.ettoday.net/news/20140902/396534.htm>。
- 『東森新聞雲』2015 年 2 月 3 日、<http://www.ettoday.net/news/20150203/462880.htm>。

- 『報橘』2014 年 12 月 25 日、<http://buzzorange.com/2014/12/25/kps-internet-election-strategies-1/>。
- 『華視新聞』2014 年 11 月 16 日、<http://ppt.cc/qJ6v>。
- 『華視新聞』2014 年 9 月 5 日、『聯合晚報』2014 年 11 月 8 日、<http://udn.com/NEWS/NATIONAL/NATS3/9052874.shtml>。
- 『蘋果日報』2011 年 8 月 5 日、<http://www.appledaily.com.tw/appledaily/article/property/20110805/33575192/>。
- 『蘋果日報』2014 年 9 月 11 日、<http://www.appledaily.com.tw/realtimenews/article/new/20140911/467621/>。
- 『蘋果日報』2014 年 11 月 21 日、<http://www.appledaily.com.tw/appledaily/article/headline/20141123/36224669/>。
- 『蘋果日報』2014 年 11 月 28 日、<http://www.appledaily.com.tw/realtimenews/article/new/20141128/515058/>。
- 『蘋果日報』2014 年 5 月 31 日、<http://www.appledaily.com.tw/realtimenews/article/new/20140531/407895/>。
- 『蘋果即時新聞網』2014 年 11 月 20 日、<http://www.appledaily.com.tw/realtimenews/article/new/20141120/510210/>。
- <http://news.cts.com.tw/nownews/politics/201409/201409051496356.html>。
- 陳先才「服貿協議爭議的背後」『美麗島電子報』2013 年 7 月 3 日、<http://ppt.cc/3pgA>。
- 陳朝建「國民黨的明天過後」『兩岸公評網』2014 年 12 月 1 日、<http://www.kpwan.com/news/viewNewsPost.do?id=1043>。

